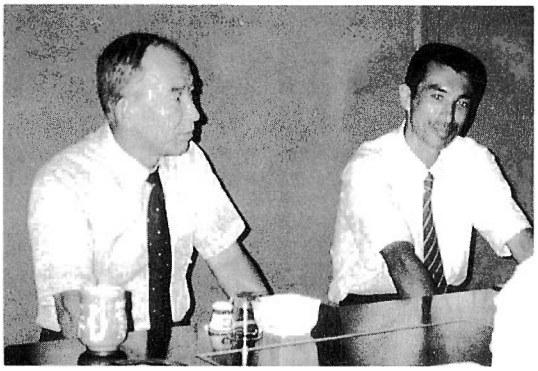
## 翠巒体育会対談

# 「高崎高校の運動部の今後」

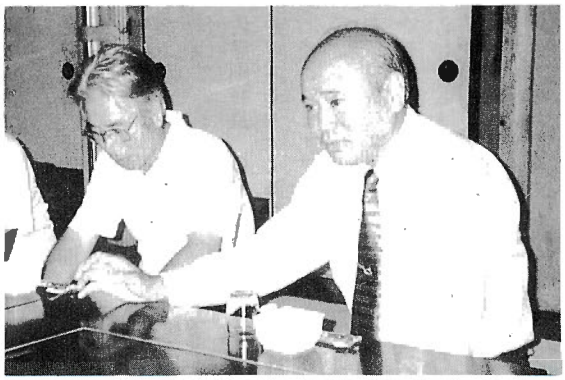
さる八月二十七日、高崎市内にて一昨年高崎高校に赴任された金井秀一校長と、同じく高崎商業高校より赴任なされ、本年度より体育主任となられました立見賢治先生、そしてこの夏も活躍した野球部をご指導くださる田端穣先生をお迎えして、翠巒体育会役員との懇談会が行われました。金井校長は二年前まで前橋商業高校の校長を務めておられました。県下屈指のスポーツ校である前橋商業の運動部を育成された手腕への期待をこめて、開校以来初めての高々OBの校長である金井校長の高々運動部へのご意見などをお伺い致しました。



金井校長と立見先生（右）

**岩田会長**　本日はお忙しい中お越し頂きましてありがとうございます。この懇談会では学校の運動部の現状ですとか、OB会に対する学校からの要望などをお伺いすると共に、OB会からの学校への要望なども少々お話させていただきたいと存じます。

**金井校長**　本日はこのような場を設けていただきまして、私共も喜んで伺わせていただいた次第でございます。校長としての私の思いと、翠巒体育会の皆様との思いはおそらく同じであると推察致します。高々といえば昔から文武両道、勉強も県下一、運動もどこにも負けないという気概と実績を誇ってきたと思います。しかしながら近年私学の台頭、公立の地盤沈下、或いは進学状況が厳しくなってきたことなどにより、次第に、全国的に公立進学校のスポーツの成績が低迷していると言えるのではないかと思います。そういう中にあり、高々も例外ではなかったと言え、私共も外から見て大変残念に思っていました。はからずも自分が一昨年高々の校長を拝命した時に、スポーツを何としても強くしたいと考えておりました。加えて、スポーツと勉強を両立させるというのが私の主義ですので、運というのは、それは本物ではない、両方ともいい加減だからそうなるのだろうと考えております。その信念を持ちまして、文武両道の高々の黄金時代を復活させたい。そのためには、是非翠巒体育会の皆様にも、物心両面にわたるご支援、ご鞭撻をお願いしたいと、このような気持ちでおります。



岩田会長

**岩田会長**　まず、今年の高々の高校総体やインターハイなどの成績はいかがでしたでしょうか。

**金井校長**　五月にありました県の高校総体では、ご承知のように十数年前は高々は二、三位くらいの位置にいたのですが、次第に下がってきて一昨年あたりは落ちるところまで落ちまして、総合で二十八位になってしまいました。これは男女別れるわけですから、男子校で九学級あって二十八位というのは相当に屈辱的な順位でして、これにはあちらこちらからかなり馬鹿にされました。その後だいぶんハッパをかけまして、昨年が十五位、今年が十一位になりました。なんとか早く一桁にして、かつてのように二、三位を狙えるところまで持っていきたく思っております。また、当時私は高体連におりまして聞いた話では、高々は、関東大会への出場が県下でも一番多く、高体連が出す補助金が一番多かったとの事です。いまは関東大会なども縁が薄くなりましたが、今年あたり、水泳、柔道、ソフトテニスなどが出場の機会を得ました。少しずつではありますが、各部全体的に力が付いてきたなと思えます。例えば、野球部は私が赴任した当初上毛新聞に久々の公式戦勝利などと書かれていたものが、一昨年秋、昨年秋、今年春とベスト8に進むなど安定して力が出せるようになりました。先日の選手権予選でも九分どうり前商に勝っていた試合を最終回で逆転されまして惜しくもベスト16、新チーム

（次頁へ続く）

にそのあたりの課題を残したものの、とても良いチームになりました。ただ、選手をみますと他の学校のように中学時代有名な選手がいるというのではなく、まったく無名の選手諸君がもてる力を最大に発揮して活躍しているというのは、かなり頑張った成果であると思っております。また、ベスト8などに続けて入れるのも監督はじめ指導者の先生方の手腕によるものと考えております。逆にいえば、優れた素質を持ち、核になる選手が加入することで、甲子園をも狙うことは不可能ではないと言えると思います。

**岩田会長**　野球といえば五十六年に甲子園へ出場したときのことは良く覚えています。あの前後の年はサッカー、ラグビーは全国大会へ行き、バスケット、バレーもインターハイへ、その他にも柔道、剣道、テニスなどあの当時は全体的に強かったですね。また、そういう時にはOB会も非常に燃え上がりまして、熱心に応援していたものです。でも、現役の活躍が聞かれないとOB会の活動も萎んでしまったりするものです。

**金井校長**　私は高校のスポーツと言うものはまず人であると思います。つまり優れた指導者によって育成されていくものだと信じております。よく社会人や、プロスポーツなどでは人、モノ、金といいます。良い指導者に充実した施設、そのうえ大金をかけるのが強化に繋がるといいます。もちろん高校でもその三つがあれば良いのでしょうが、その中でも最大の必要性は指導者、資質と熱意のある指導者であると思います。高々の場合は施設、設備は県下でも一番恵まれております。お金の面においてはどこの学校もそう変わりはありません。そうなりますと、やはり指導者如何ということになりますが、現在非常に熱心な優れた指導者が増えてきております。そういう意味で高々も今後期待ができるといえると思います。こちらにおられます立見先生も、高商のバスケットを十年間で全国に通用するチームに育て上げられた方で、川島先生の後を引き継いで高々のチームを鍛え上げていただける方だと期待しております。サッカーでは県下でも優秀な三名の内に数えられる坂田先生がご指導しておりますし、寺町先生のご指導により柔導がベスト4、8の常連になりました。ラグビーは高体連で長らくラグビー専門部長をなさっておられた高橋先生に加え、若手の本校の卒業生であります筑波大学ラグビー部出身の桜井先生がこの春より担当となり、この二人のコンビでいつかは農大二高の壁を破っていただけるのではないかと楽しみにしております。今ま

で指導者のいなかった硬式テニスは、生物担当の塚越先生と、中谷先生がご指導くださり、期待のもてる方向に進んでおります。ソフトテニスは英語担当の今井先生がこれまた熱心な先生で、毎年インターハイへ選手を送り出しております。今年も関東大会で全国二位の巣鴨商業を破るなど、大変健闘しております。またバレーボールがここ数年初戦敗退が続いていたのですが、卒業生の木暮先生が昨年赴任なされ、一生懸命ご指導くださって、二年目でベスト8まで引き上げていただきました。現在は、剣道、卓球などの部に専門に指導できる先生がいないものですから、今後、指導者を得られたらと考えております。

## 「公立高校と推薦制度」……

**秋池副会長**　定期戦の戦績はいかがですか。

**金井校長**　連敗した時期もありましたが、ここ三年間は二連勝の後、昨年負けました。最近の傾向と致しまして、一般の部では勝てるのですが部活動対抗のほうで負けています。

**佐藤副会長**　OBの間でも野球部は以前から、サッカー部も今年から定期戦を行っております。現役を含めまして、対抗意識は今でも変わらずに楽しんでおりますが、高々はずうっと部活で強かったのでその点は寂しいですね。そのうえ、前高も最近はスポーツは低調だそうですね。

**金井校長**　高々、前高は共に公立進学校ですが、両校に限らず全国的に見ますとスポーツ、進学とも公立進学校の地盤沈下が顕著ですね。勉強だけは頑張っているという学校もありますが、そういう傾向だからこそ、高々が、スポーツも勉強も頑張りたいものです。ただ、現在は中学で傑出した選手がいると県外のスカウトが鵜の目鷹の目で見出だして、あんな遠方からと思うような学校が皆県外の学校に連れていってしまって、なかなか選手も得られないのが県内スポーツの現状ではないでしょうか。

**岩田会長**　そう言えば「あかぎ国体」の時、バスケットで東毛に優れた選手がいて、当時国体少年男子チームのヘッドの立見先生が国体チームに迎えるのを楽しみにされていたのです。ところがその選手が県外のある高校にスカウトされてしまい、とても残念がられていたのを覚えております。

**立見先生**　いまはそれが当たり前のようになっていますので、各学校の指導者共困っております。

**山口副会長**　生徒もそれを目指すようになっているようですね。

**岩田会長**　そのためにも昨年度から導入された推薦制度の活用を期待しているのですが。

**金井校長**　そうですね。推薦制度とは、その学校に入りたいと言う学生の強い意思を汲み上げる制度として始まったものですが、基準的なものとしてまず学力全体が優れていること。また特定の教科、科目に優れていること。あるいは部活動、ボランティア、生徒会活動などに優れていること。この三点のうちどれかの条件を満たしている生徒が対象となります。

**岩田会長**　と言う事はスポーツなどで、優秀な成績を上げた生徒も資格が得られるわけですね。

**金井校長**　はい。初年度のこの春は各中学校ともかなり厳しい選抜をされた生徒を推薦しておりまして、人数にして四十三名の推薦入学者がありました。

**岩田会長**　運動部関係では良い選手が入りましたでしょうか。

**金井校長**　推薦に関しましては、超一流選手はもとより県外に流出してしまいますし、選抜が厳しいこともございまして素質のある選手と言うところにとどまっております。また一つ大きな問題として、校区が従来よりだいぶ狭くなっており、受験可能な地域に人材の絶対量が少なくなってしまったのです。またそれを広げる運動をして、隣接地域からは十五%程度は入れるようになりましたが、もっと校区が広がればまた良い選手が推薦入学制度をもっと活用してくださると考えております。例えば運動だけを続けたいと言うのではなく、スポーツに打ち込んでいて、いずれは教員になりたいと言うような目的をもっている生徒をピックアップできればと思います。

## 「スポーツと人格形成」……

**岩田会長**　お話の冒頭で文武両道のお考えを伺いましたが、我々の学生時代も運動で活躍して、東大へストレート入学する学生などが当たり前のようにおりましたが現在はいかがですか。

**金井校長**　スポーツが強くなったら、勉強のほうが駄目になるなどと良く言われる方がおりますが、それは昨年や、今年の卒業生を見ればそれは間違いである事が良く分かります。昨年度末、二学年でトップをとった生徒はこの夏野球部で活躍した生徒でした。全体としても進学成績は上がっております。

**山口副会長**　スポーツが人間的な繋がりを育成すると言う面を考えれば、学業のために運動部活動が低調になると言うのはとても残念な思いがあります。たとえばOB活動に関しても運動部の年代を超え、種目の別を超えての付き合いと言うものは学業の壁を超えて培われるものではないでしょうか。

**立見先生**　金井校長先生が赴任なされてから一つ変わった事に、運動部に入部する生徒が大変増えたことがあります。それと共にもちろん学力の面でも上がってきたのですが、その両道を同一歩調で努力すると言う事が定着してきたと言えると思います。運動も一所懸命する、勉強も一生懸命するというムードが生徒の間で高まってきたと言う事です。例えば、バスケット部なども従来一学年七、八人で構成されていたものが、現在三年生が抜けた一、二年生だけで、三十六人の部員がおります。他の部も同様で、すなわち学業と共に運動することの意義を理解している学生たちが、大勢高々に入学してきていると言えると思います。ただ、そういう生徒でも、その条件として一生懸命部の指導をしてくださる先生の元でなければ、部活動をしても自分たちのプラスにはならない、という考え方を持っている生徒が多いのではないかと感じます。それは、生徒たちの中学時代の状況でも同様に言える事で、中学校で運動能力の高い生徒が指導者不在の部活動を敬遠して学業に専念していたと致します。高々に入ってきた時に運動部を見て、いいかげんにやっている運動部ではまた敬遠されてしまいます。そのようなケースを極力無くしていく為にも、熱心な指導者の存在無くしては考えられないとおっしゃられているのが、校長先生のお考えであり、私共も精一杯応えて行かなければならないと感じておる事でもあります。もっとも、逆に今の生徒は運動経験もないのに、それぞれ結構厳しい運動部の練習に付いてきて、途中で退部する生徒がほとんどいないことでも、その流れがはっきり示されているのではないかと思います。その様な傾向もありまして、各運動部自体のレベルは確実に上がってきておりますので、あとはそれぞれの部に傑出した核になる生徒が何人か入ることによって、文武両道の高々の看板が復興する日は近いのではないかと考えております。

**岩田会長**　高々では現在運動部の生徒はどのくらいおりますか。

**金井校長**　今のお話の通り、各部相当の部員増の傾向がありまして、全校生徒の約六割が運動部に所属しております。ちなみに高商で四割弱とのことですので、比率としてはかなり多いのではないかと思います。そういう生徒たちが、かなり厳しい各部の練習についていっているというのは素晴らしいことではないかと思います。

**田端先生**　今年夏の大会の健闘でおほめにあずかっている野球部も、選手のほとんどは入学時初心者に近い状態で、硬式野球ができるのか心配したほどでしたが、その上達ぶりは目覚ましく、本当に最後の大会では実力の一五〇%の力を発揮したのではないかとの印象があります。その頑張りは学業面でも生かされており、素晴らしい高校生活をそれぞれが送ることが出来たのではないでしょうか。

**立見先生**　昨年あたりも何人かおりますが、これからは三年間運動部で厳しい練習を頑張り続けた生徒の中から、東京大学などに入学する生徒がぞくぞくと現れることが予想されます。また、厳しい練習のところほど学力的にも向上が見られております。

**金井校長**　生涯学習という考え方からも、生涯スポーツという面において高校時代、何か打ち込むスポーツなどがあった生徒というのは、社会に出てからもその影響は多大であると考えます。例えば武道は

礼に始まり礼に終わるといいますが、私が、高々にきたとき一番がっかりしたのは、私が総体の練習を各部見て回ったとき、どの部でもどこの馬の骨がきたかという顔で迎えられました。これではいけない。これでは運動など強くなるはずがないと思いました。かつての強かった当時の高々は練習の最中でも校長先生が顔を出せば、さっと全員が集まって挨拶をしたものだと聞いていましたので大変驚きました。これはまずそこから始めなければいけないと思い、全校生徒の前で挨拶をしようと繰り返し言っていたら、今度の校長は挨拶を強制するなどと学校新聞に書かれました。（笑）強制とかそういう訳ではないのですが、赴任した最初の一年間はそういう訳で、生徒とはずいぶんやり合いました。生徒総会等のときに、数年後に本校を去る時は生徒諸君に石持て追われる如くでも構わないが、そのかわりどんなに憎まれても言いたい事は言う、と宣言致しました。そして挨拶の励行を第一においたのです。

**岩田会長**　その後、挨拶はできるようになりましたか。

**金井校長**　ちょうどここに来る途中、教務主任の先生と一緒だったのですが、その先生がバス持ちの時間にある部の練習をちょっと覗いたら、練習中の生徒がさっと集まってきて、こんにちはと挨拶してくれました。初めてのことで大変驚きましたとおっしゃっておられました。

**佐藤副会長**　この春のサッカーの総体の試合を見にいったときに、校長先生が運動シューズを履いて応援にいらっしゃってくださったのを拝見して、OBとしてとても嬉しく思いました。

**岩田会長**　バスケットでも、去年のインターハイ予選で校長先生が、前橋の市民体育館に生徒を激励に来てくださったのを拝見致しました。私の記憶では歴代の校長先生の中でも初めてのことです。それは高体連の会長を長年なさっておられて、高校スポーツの事を知り尽くしている校長先生だからこそ出来ることではないかと思います。

**金井校長**　私自身がそういった事ができないと絶対に学校のスポーツも強くならないと思っております。

**岩田会長**　近頃はOBもなかなか現役の試合を応援に行けません。校長先生の姿勢には感服致します。そう言えば以前いらっしゃった先生で、OBに対してマネジメントをしっかりなさっていた先生がおられました。生徒の指導はなさらないのですが、何月に何の大会があります、翌月は何日に試合がありますとこまめにOBのところに書簡をくださり、応援にきてくれ、激励にきてくれと連絡がございました。またそういう時はOB会も活発に活動しておりまして、物心共に応援しておりました。そういった先生のご苦労にも大変感謝しております。

**山口副会長**　物心両面といえば翠巒体育会は些少ですが関東大会出場選手とチームに激励金を会長自ら手渡して壮行する慣習があります。また、マラソン大会にはトロフィー等を出させていただいております。

**金井校長**　それは高々全員にとってとても励みになることだと思います。何卒今後もよろしくお願い致します。OBの方に練習や試合にお顔を出していただけることは大歓迎でございます。現役選手諸君に是非OBの背中を見せてあげてください。

## 「高々ルネッサンス」……

**岩田会長**　一時期高々の進学率が悪いと世間で言われて、スポーツなどよりも勉強に力を入れなければいけないと言うムードに学校も、PTAも、OBも支配された時期がございました。運動部活動が肩身の狭い時期が、暫く続いた影響がいまの高々の低迷の原因の一つではないかと思っております。文武両道も掛け声ばかりで翠巒体育会としても憂えておったものです。本日お話しを伺いまして、いよいよ高々の文武両道の校風が実感として蘇ってくる印象を受けました。

**金井校長**　私が一年生が入ってくる入学式に、父兄と生徒の前で必ずお話ししていることがございます。高校時代の三年間は我々が思い出してみると解ることですが、人生の中で一番光り輝いている時期である。心身共にエネルギーに満ち溢れている年代で、どんなに疲れていても一晩寝れば治ってしまうようなそんな時である。その光り輝く時代に、頭と、体に加え、ハートを鍛える錬成道場が高崎高校である。だから頭だけ鍛えて体や、ハートは鍛えなくても良い、勉強だけすれば良いと言うことはありません。同様に、スポーツで体だけを鍛えて、授業に出てはうわのそらで昼寝をしていたり、ハートの無い、思いやりの心のない人間ではいけない。両立どころかこの三つの柱を共に立て、三つを鍛えるのであるから大変なわけです。でも、それがこの年頃なら可能であるという事をぜひご理解して戴きたく思っております。

**秋池副会長**　それは私たちの現役時代に田中悦平先生の提唱された、3F精神に通じるものがあります。3Fとはフェアプレー、ファイティングスピリッツ、フレンドシップの頭文字で、高々の伝統的な学生気質として培われてまいりました。そして金井校長先生の提唱された「**高々ルネッサンス**」、すなわち錬成道場としての高々をと言う考えは現役生徒諸君にも素晴らしい道標となると思われます。

**金井校長**　「**高々ルネッサンス**」と私が提唱致しましたのは、大袈裟なものではなく、人間として基本的な生活習慣の確立、当たり前のことを当たり前にできる、人間としての成長の助力をしたいと言う事です。例えば先程の挨拶をできないこと。勉強だけ、或いは部活動だけに一生懸命であることなどの偏り。それらは砂上の楼閣であり、全人格として肯定できるものではない。その事を先生方が良く理解してご指導くださっておりますので、その熱意が今後の高々を作って行くものと信じております。OBの方も、東大生が何人出たかと言う事よりも、人間として基本的なことができているかと言う事を注目してくださる。それが長い目で見た、高々の伝統になるであろうとご理解いただけると幸いです。

**岩田会長**　金井校長先生、田端先生、立見先生、本日は貴重なお時間を拝借致しまして誠にありがとうございました。今後ともOB、翠巒体育会は物心両面にわたり学校並びに現役生をできる限り応援致して行く所存でございます。高々生の活躍を期待しております。

# OB会の活動(1)

## 平成四年度現況報告

今年、更に特筆すべき行事といたしましては、八月十六日に高々グランドで行われました、初めての前高サッカー部OB会との第一回定期戦でございます。試合当日は好天に恵まれ、全10試合が行われました。試合の合間には記念写真を撮ったりして、お互いに親睦を深めました。今後もぜひ、OB定期戦を続けていこうといった声も沢山聞かれました。スタッフの一員として、喜ぶと共に、お世話になりました、田中、坂田、両先生を始め関係者の方々に深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、OB会チーム、翠巒クラブも六戦全勝といった状況であります。今年は2部リーグ優勝、一部昇格し、実力アップしたOB選手を現役サッカー部の練習にも参加させていきたいと思っております。翠巒体育会及び卒業生の皆様、新聞等で試合結果を見ましたら、是非、話題の一つとして下さい。

### サッカー部

高橋　義昭（74回）

**「群馬リーグ一部昇格を目ざせ！」**

現在、会員の数が四百名を超えることとなりましたサッカー部OB会について、主な活動状況をご報告申し上げます。

一月二日には恒例の初蹴会・一月十一日には総会と新年会・一月下旬からは天皇杯県予選（三回戦敗退）・三月にはサッカー部OB会の名簿発行・五月から始まった群馬サッカー二部リーグへの参加、そして夏の現役サッカー部への支援等行ってまいりました。

### 卓球部

角倉　信久（69回）

一年余り前より卓球部OB会の活動を振り返ってみますと。

平成三年正月三日

高々体育館においてOB現役卓球大会。夕刻より通町『万嵐』において新年会。新年会三十一名（顧問含む）参加

平成三年六月二十二～二十三日

栃木県『ユーアイカントリークラブ』において二日間に渡ってゴルフコンペ挙行。延べ二十二名参加。

平成三年十一月十五日

『美野原カントリークラブ』においてゴルフコンペ。十六名参加。

平成四年正月四日

高々体育館においてOB現役卓球大会。その後で鞘町『美家満』において新年会。二十三名（顧問含む）参加。

平成四年六月十八日

『ツインレイクスカントリークラブ』においてゴルフコンペ。十六名参加。

と、書き連ねて来て、ゴルフばかりとられがちだが、現在OB会活動の中心となっているのは、毎月第二土曜日に乗附町『マツヤ研修所』で欠かさずに行なっている卓球部OBの卓球練習会であります。OBの卓球の実力が落ちないのは、その練習の成果によるところが大きく、新年のOB現役卓球大会で、現役がどれだけOBに勝つかによって、その年の現役の活躍が推し量れるのです。

### 野球部

清水　正郎（75回）

野球部OB会は、毎年の総会において事業計画を決定し、活発な活動を行っております。

特に前高野球部OB会との定期戦は、毎年の行事として定着しております。今年は、六月六日、城南球場において、32期の高橋氏以下約40名の会員が参加し、盛大に開催されました。高々は川端(81)、細谷(57)両氏の投手リレー、対する前高も完全試合の松本氏が登板するなど、楽しい中にも白熱した試合展開の末、10対10の引き分けで終了致しました。

他にも、会員相互の親睦をはかる催し、また現役選手に対しての物心両面においての援助等、今後もより一層充実した活動を目指しております。

### 翠巒体育会 平成元・2・3年度 会計報告

平成4年3月31日まで

| 収入の部 | | | 支出の部 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 項目 | 金額 | 備考 | 項目 | 金額 | 備考 |
| 繰越金 | 52,402 | | 総会費 | 226,063 | 平成元年12月12日 |
| 年会費 | 300,000 | 25,000×12部 | 会報11号 | 381,100 | |
| 総会会費 | 195,000 | 5,000×39名 | 事務局事務費 | 300,000 | 平成元年、2年、3年 |
| 助成金 | 600,000 | 平成2年度、3年度 | 理事・役員会議費 | 43,586 | |
| 雑収入 | 41,987 | | 慶弔費 | 36,050 | |
| 合計 | 1,189,389 | | | 986,799 | |

差引残高　202,590円　会計　佐藤　義夫　監査　丸山　功一
〃　安中　隆一　〃　廣田誠四郎

特別寄稿

# バルセロナオリンピックとレスリング人生

群馬大学
教授　柳川益美
(65回)

夏の地中海地方は、灼熱の太陽が容赦なく照り付け、田畑は人々に恵みを与えようと潤いと涼しさをもたらす雨を天の神に求めてもいっこうに聞き入れてくれない。そこに棲む人々は、そんな自然に挑戦的に毎日の散水に精を出し、太陽が陰るころから活発に動きだす。おそらく自然に逆らいもせず、暑さにじっと耐えるような生活をしていたなら、闇夜に甘い恋を語る情熱を持たなかったなら、豊富な水を汲み出す工夫と努力をしなかったなら、コロンブスの世界征服の航海やダリ、ピカソ、ガウデーなどのスペイン文化は存在しなかったのではないだろうか。また、バルセロナオリンピックの13個の金メダルも存在しなかったのではないだろうか。

バルセロナオリンピック以前のすべてのオリンピックを合わせても合計4個の金メダルしか取っていなかったスペイン、灼熱の国が熱狂すると一挙に13個の金メダルを取るというのであるから驚かされる。ソウルオリンピックの時のように発展途上国のなした技ではなく、歴史的な地中海に沢山の伝統文化を持ち、いまは言わば休眠状態とでも言える国が、一端眠りを覚し、熱狂したときの力の大きさに驚かされずにはいられない。ピカソやガウデーのように爆発的エネルギーを燃やすことにより文化を産みだす風土性を持っているように思われる。

おそらく、バルセロナの人々はオリンピックの終了とともにスポーツ文化に対してはまた休眠状態に入るにちがいない。ワインに、ダンスに、闘牛に人々が熱狂する文化には事欠かないバルセロナである。

バルセロナには思い出があった。大学院ドクターコース時代ドイツへのレスリング留学時に良き友人がバルセロナ出身者であった。そんな友人の国からオリンピックのレスリング競技をテレビ放送を通して解説をするなんて夢を見ているようであった。

レスリングとの関わりは、高校2年生の時東京オリンピックのレスリングの活躍に将来の夢を見たことから始まる。身長も体重もやや小振りの体型は、いくら運動能力が高くてもなかなか適したスポーツ種目に接する機会がなかった。レスリングは、体重制限があり、とてもフェアーなスポーツとその時から自分のスポーツと心に決めた。同じ体重のなかに凝縮できる能力を競う。自分にも出来るのではないかと。

進学は、レスリングの強い大学と思い日本体育大学を選んだ。同級生のほとんどがインターハイの優勝者や入賞者であった。まったく素人の自分にとってレベルの差に屈辱の日々が続いた。三年生で追い付き、四年生でレギュラーになり、卒業の三日前の全日本選手権に二位に入賞した。社会人になってからも天敵が一人いて、国体も、全日本も、全米も、ほとんどの大会はまんねん二位、しかし卒業の二年後全日本社会人選手権でチャンピオンになった。

選手としてのオリンピック参加は果たせなかったが、指導者としての参加の夢が残った。大学院を終了し、ドイツ留学を終え、タイミングよく群馬大学の専任講師として就職が決まった。就職して二年目に情熱ある学生との出会いから群馬大学レスリング部を設立することが出来た。スポーツ交渉史の専門研究と平行してレスリングのスポーツ科学研究に開け暮れる日々が続いた。

あかぎ国体監督、ナショナルコーチ、そしてソウルオリンピックでは日本アマチュアレスリング協会のスポーツ科学委員長として二個の金メダル獲得のトレーニング計画を立てた。根性論から科学的トレーニング論への転換を試みた。それは、皮肉にも東京オリンピックで五個の金メダルを、ロサンゼルスオリンピックまでに18個の金メダルを獲得し、自分をレスリングの世界へ引き込んだレスリングの初代会長八田イズムへの挑戦でもあった。

勝つためのトレーニング理論、さらにはスポーツの理念までもがオリンピックを頂点に変貌しつつある。

スポーツ科学の存在が金メダル獲得の地図を変え、情報化社会がスポーツの理念を変えようとしている。

バルセロナオリンピック終了後、様々な国の金メダルに対する評価が公表された。名誉が金で測られ、オリンピック主義、勝利至上主義が強化され、金メダル数と国力が重ねられて評価されている。様々な情報が飛び交い、選手を指導者をひいては世界中の人々までをも混乱に巻き込んでいる。このようなときこそ冷静に判断し、スポーツの理念を確立しなければならない。

バルセロナではスポーツの在り方について、レスリングの惨敗の原因について、などなど沢山のことについて考えさせられた。

問題解決には、友人の国スペインの情熱を持ってことに当たればたいていのことはクリアー出来ることを学び帰国した。一生続くレスリング人生である。

# OB会の活動(2)

## 剣道部

横田　茂（55回）

平成四年一月三日、総会を網中顧問をお迎えして高崎ビューホテルにて盛会に開催致しました。

総会に先立って高々旧剣道場にて、別府顧問の指導のもとに初稽古をおこない、一汗流した後、現役部員と剣友会々員との対抗戦をおこない例年どうり現役、OBの絆を強くいたしました。

総会においては本年の活動方針として平成5年を四十周年記念年として会員名簿の整理と準備に会員の協力をお願い致しまして、盛会裡に終了致しました。

## ラグビー部

木村　洋（59回）

高崎高校ラグビー部OB会では、本年一月十二日、高崎・ビューホテルで総会を開催。深沢岩吉前会長の後を受け、設楽嘉男氏が会長に選任されました。

なお、会長のほかに名誉会長・顧問・顧問幹事・副会長・監査・理事長・会計・理事など、計二十三名の平成四年度新役員がそれぞれ新任または再任されました。

現在OB会員は、昭和三十三年卒の第一期から本年卒の第四十五期まで総勢四百五十八名となっています。

また高々ラグビーOB会チームを、地元在住のOBを中心に結成することが、去る六月六日開催の理事会で決定されました。

これは、現役チームの活性化にもプラスとなり、また高々を卒業し、社会人となってからのラグビーをする場、受け皿が必要であるとのことから、結成されるもので、部長・下山功、主将・中村均、主務・清水透として、近く群馬県ラグビー協会にチーム登録の手続きを行う運びとなっています。

## 水泳部

小見　忠司（73回）

本年六月二十日、恒例の合宿にあわせ、翠巒会館にて定時総会を開催、なぜか前高出身の顧問、町田先生をはさみ現役選手と交流、十二分な激励を行いました。それに応えるべく、関東大会十名参加、国体での活躍等今シーズンの選手諸君にOB会員一同感嘆しております。

役員選任の件では、水泳を天職とする小茂田前会長が水泳ブームとオリンピックイヤーが相まって海外遠征など多忙を極めたため新谷恭一新会長（54回）のもと、より充実したOB会活動を目指すこととなりました。

新年会、定時総会、忘年会と定着した年間行事をより盛大に行うとともに冷たくもあり温かくもあった高々のプールで文字通り身を焦がした我々の心の糧となるOB会を大切に育てていくよう会員一同活動しております。

## バスケット部

小澤　武男（57回）

ポテさん（清水先生）!!おめでとう

バスケットボール部の部長先生であった清水貞保先生が春の叙勲で勲五等瑞宝章を受章されました。群馬県のバスケットボール関係者では初めてのことです。この受章の祝う会が六月二五日(木)高崎のビューホテルで盛大に行なわれ、出席者は高々バスケットボールOB、協会関係者一三〇名でした。

## 応援部

丸山　功一（60回）

応援部総会並びに新年会を本年一月十八日(土)サンピア高崎で行いました。

活動状況の発表、会計報告の後、役員改選を行い、若いフレッシュな新役員が決定しました。

会長・塚越真（64期）、副会長・永井功（65期）、秋山賢治（74期）の各氏が選任されました。

新塚越会長を中心に、OB間の結束をはかり、高々応援団ここにあり〃〃という姿を強く堅持していく所存です。

現役運動部諸君の活躍を期待します。

# 翠巒体育会役員名簿 (平成4．9．25)

| | 氏名 | 回 | 住所 | 電話 | 学校側顧問 |
|---|---|---|---|---|---|
| 会長 | 岩田　武雄 | 53 | | | 学校長・金井　秀一 |
| 副会長(事業) | 山口　正敏 | 58 | | | 教頭・宮川　清 |
| 〃(事業) | 秋池宗一郎 | 65 | | | 運動部長・立見　賢治 |
| 〃(事業) | 川手　義昭 | 62 | | | |
| 〃(庶務) | 横田　茂 | 55 | | | |
| 〃(庶務) | 塚越　章司 | 58 | | | |
| 〃(庶務) | 木村　洋 | 59 | | | |
| 〃(書記) | 小沢　武男 | 57 | | | |
| 〃(書記) | 東瀬　朝紀 | 69 | | | |
| 〃(会計) | 佐藤　義夫 | 58 | | | |
| 〃(会計) | 安中　隆一 | 65 | | | |
| 会計監査 | 丸山　功一 | 60 | | | |
| 〃 | 廣田誠四郎 | 64 | | | |
| 顧問 | 国峯善次郎 | 50 | | | |
| 〃 | 清水　貞保 | 30 | | | |
| 〃 | 岡田　由重 | | | | |
| 理事 | | | | | |
| 陸上 | 横尾　信男 | 65 | | | 岩井　寿史・市川　敏美 |
| | 坂本　正樹 | 71 | | | 戸塚　英之 |
| 卓球 | 深沢　昇 | 57 | | | 小笠原祐治・井本　嘉宣 |
| | 根岸　博昭 | 68 | | | 船戸　秀道 |
| 軟式庭球 | 丸山　博 | 68 | | | 今井　俊治・茂木　道弘 |
| | 信沢　紀夫 | 68 | | | 品川　和男 |
| バスケット | 反町　定夫 | 50 | | | 立見　賢治・水上　光久 |
| | 友松　敬三 | 61 | | | 町田　仁 |
| | 林　章 | 67 | | | |
| バレー | 掛川　秀雄 | 48 | | | 木暮　弘・矢島　哲雄 |
| | 織茂　広昭 | 50 | | | 児島　修 |
| ラグビー | 設楽　嘉男 | 57 | | | 櫻井　清・高橋正四郎 |
| | 上羽　正弘 | 72 | | | 長岡　秀一・波戸場研二 |
| サッカー | 赤羽　英光 | 73 | | | 坂田　和文・田中　彰 |
| | 清野　哲雄 | 74 | | | 大谷　法明 |
| | 原　勝弘 | 78 | | | |
| 水泳 | 新谷　恭一 | 54 | | | 町田　仁・吉田　武彦 |
| | 小此木　勝 | 56 | | | 立見　賢治 |
| 柔道 | 石井　清一 | 57 | | | 寺町　良次・女屋　浩 |
| | 関口　茂樹 | 63 | | | 上野　臣吾 |
| 剣道 | 藤木　正行 | 69 | | | 田嶋　亘・栗原　大介 |
| | 浅名　誠 | 70 | | | 富沢　栄世 |
| 野球 | 小山潤一郎 | 69 | | | 田端　穣・小林　俊之 |
| | 清水　正郎 | 75 | | | 池之上昭義・斉藤　勇夫 |
| | 小林　均 | 77 | | | 樽見　尚人 |
| 応援 | 塚越　真 | 64 | | | 植原　政明・井本　嘉宣 |
| | 永井　功 | 65 | | | 高橋　寛 |
| | 秋山　賢治 | 74 | | | |
| 編集部 | 大崎　哲朗 | 77 | | | |
| 事務局 | | | | | |
| 事務局長 | 小林　俊之 | 76 | | | |
| | 櫻井　清 | 81 | | | |
| | 木暮　弘 | 82 | | | |

## 編集後記

第十一号（平成元年発行）から二年も休んでしまって大変申し訳ありません。

今十二号は、特集号ともいうべき金井校長先生、田端先生、立見先生を囲んでの対談の記事で紙面のほとんどを占めてしまい、現役生徒の記録、抱負を照会できず残念です。しかし対談の中に記されたように、現役生徒は文・武共に頑張っている様子なので今後の活躍が楽しみです。

近い将来（創立百周年迄）に全国大会にいくつかの運動部が出場するのも夢ではなさそうです。

その為にも我々翠巒体育会の会員もこの会を創設した頃の様な若々しい、活動的な翠巒体育会にし、後輩の後押しをしたいものです。

（丸山功一）

翠巒体育　第十二号
平成四年九月二五日発行
翠巒体育会事務局
〒三七〇
高崎市八千代町二―四―一
群馬県立高崎高等学校内
電話
〇二七三（二四）〇〇七四
印刷　㈲オーサキ